

音の散歩路

～ブラームスの交響曲第4番～ フルトヴェングラーの演奏から～

京都大学名誉教授 (Ph.D.)

一般財団法人カワイサウンド技術・音楽振興財団 評議員

サウンド技術振興部門審査委員



山本 裕

昨日NHKのうたコンという番組を見るともなしに流していた。フォークソング特集ということで、1960年代後半から流行した曲が色々流れていた。懐かしく思える曲も多く、往時を思い出して感慨にふけた方もさぞ多かったろうと思われる。

しかしながら、時間をおいて聴くと驚くほど色褪せてきこえるものも多かった。総じてセンチメンタルであり、郷愁を誘いはするが割合と単調なメロディと伴奏に徹した和音で構成された副声部（ギターの弾き語りという制約のせいもあったろうが）ということになるだろうか。個人的な意見ではあるが、今の音になれた耳からすると、かなり単純で深い味わいというものに欠けた曲という印象も抱いてしまった。

1960年代という今から優に半世紀以上は前のこととなる。その間の日本の音楽のあり様の進歩、進化というものも無視できないものだったのだなと否応なしに感じさせられることとなった。日頃日本のポップスの熱心な聴き手ではなく、例えばYOASOBIとか米津玄師という名前も近頃ようやく知った筆者なのだが、その身からしても最近の音楽の作られ方やその曲の味わいの複雑さと比べると、昔のフォークソングの曲の単純さは際立って聞こえるように思われた。

評論家の故吉田秀和氏がJ. シュトラウスとモーツァルトを比較して、「青きドナウ」の和声と展開の単純さをモーツァルトと比較して論じておられる（「主題と変奏」中公文庫—今なぜか手元にあるべき原本が見当たらないので正確な引用ができないが、大意はこの通りのはず）。正直この比較はあまりフェアではないと思ったものだが、上記のフォークソングと今現在の日本のポップスについては、この比較以上の差を感じると言って良いように思う。

厳しい言い方をすれば、それはこの50-60年の間に積み重ねられた歴史の審判の重みであり、嘗て人々に愛されたフォークソングの数々はその時の流れの審判に耐えられなかったのだろうということを感じざるを得なかった。

それでは音楽もその折々の人々の好悪や流行に従って変化し続けていだけなのか、あるいは進歩していった前のは乗り越えられ、ノスタルジーの対象になっていだけなのか。

そういう部分もあることは否定できない。大概の商用の流行歌はそのように作曲され、時の審判を待つという使命とは無縁のところまで消えていく運命にあるだろう。私の高校時代のある同級生は、クラシック音楽は過去のものでジャズによって乗り越えられたと真顔で主張していた。

しかし果たしてそれだけだろうか。クラシック音楽は現代音楽によって完全に「乗り越えられた」のか。ビートルズはジャズを超えたのか？あるいはモダンなロックはビートルズを過去の扉の彼方に追いやったのか。

そう言い切るのは単純にすぎるだろう。いまでもクラシック音楽は世界中で聴かれているし、未だに生きた音楽として愛好されている。ジャンルの違いはあれど、その中のいくつかのものは厳しい「時の審判」というものを乗り越えて、人々の中に永遠のいのちを見出しているだろう。クラシック音楽について言えば、バッハやベートーヴェンあるいはモーツァルトはこれからも時の流れを超えて人々に愛され続けていくであろうと信じるのはそう難しいことではない。

しかしこういう古典と少し離れて、先のフォークソングで筆者の少し気になったセンチメンタルな要素に目を向けてみたい。これはその時々の人々の感じ方により密着しているだけに、世の中が変わると人々の好みの変化につれて評価のされようも変わり、よってより変化の波にさらされやすいと考えられるからである。

クラシック音楽でいえば、ブラームスがその濃厚なロマンティシズムとともに、かなりセンチメンタルな要素も併せ持った曲を多く残したことで知られている。しかし今日でもブラームスの愛好家は数多い。歴史の審判を乗り越え

て、生きた音楽として愛されていると言って良いであろう。フォークソングで感じたセンチメンタリズムの陳腐さ（と言っては強すぎるだろうか）とどこが違うか。表題に上げた交響曲第4番とフルトヴェングラーの演奏を軸に考えてみたい。

この曲がブラームスの晩年のというより一代の傑作であるというのは論を俟たない。またその演奏として、ヴィルヘルム・フルトヴェングラーによる1948年10月24日のベルリン・フィルとの演奏がこの曲の代表的な名演奏の一つであるというのも、唯一のとは言わなくとも、確固たる定評のあるものである。しかし何がこれをしてそれほどの評価を得さしめているのかは、いろいろな意見がある。筆者は実はそれらのすべてに納得のいっているものではないので、ここでいささか私見を述べてみたい。

この曲の第1楽章はHの音の4分音符とそれに続く3度下がった2分音符で始まる。このあと下のEの音から6度の上昇がこれに對を成す。フルトヴェングラーはこのHの第1音をかなり長く伸ばして、この2音の組に豊かな表情を作り出す。ここで聴かれるのは、極めてロマンティックな表情であって、しかも出だしの3度の下降はため息のように響く。あたかも叶えられないものへの永遠の憧れのように。これだけ取り出すとかなりセンチメンタルなもののように聞こえる。実際この箇所も、またそれに続

く第2楽章なども主題自体は強い郷愁を誘うもので、そこにセンチメンタルな要素は強いと言ってよいだろう。フルトヴェングラーの演奏ではことにそう感じられるかもしれない。しかし上に述べたようなフォークソングのセンチメントとは明確に一線を画すものがここでは聴かれる。

それは全体を通しての曲の進展の論理性であり、人間の心理に沿って展開される音の論理の整合性、またセンチメンタリズムに溺れない確固とした音の歩みの前進力のなせる技であろう。音楽のフレーズが内包する感情や心理、リズム、和声的内容、そこからの自然な進展の可能性、またときにそれとは反対に跳躍する展開、そういうものが音楽的論理と言ってよい流れを形成する。フルトヴェングラーの演奏ではそれらが強い必然となって聞こえてくる。

音楽を聴いて音楽以上のものが聞こえるという経験はそうざらにあるものではない。しかしここで聴くフルトヴェングラーの演奏はまさしくそういうものと言う他ない。強い郷愁を誘う、人間的な感情の発露と表現を十全に表しつつ、それを超えた美の絶対的な基準というに近いものを感じさせてくれるのが、フルトヴェングラーのこの演奏である。

第1楽章のこの導入部の素晴らしさはつとに人々の指摘するところなので、もう一箇所あまり注目されないこの演奏の素晴らしさについて

触れておこう。

第2楽章は最初管楽器主体でそれを弦のピチカートが支える。このところも神秘的な表情でありながら、同時に悠然と、しかし決然たる歩みで進行するのが素晴らしい。19世紀を感じさせるような表情だが、懐古的な表情に溺れない決然とした表情に凡百のセンチメンタリズムとははっきりとした違いを感じさせる。

しかしこの楽章で更に素晴らしいのは、それまで脇役に徹していた弦楽器が第30小節からそれこそ溢れるようなロマンティックな旋律を奏でだすところである。ロマンティシズムというのはこういうものであるという定義のようなフレーズ、旋律である。これほどの印象的な演奏は他のどの指揮者、どの団体でもきいたことがない。先程から音楽を聴いて音楽以上のものを聴く、と言っているものの最上の例がここにある。

繰り返しになるが、これほどのロマンティックでありかつセンチメントに溢れた部分でありながら、表情が高貴であり安っぽさは微塵もないところが素晴らしい。結局のところ、感情豊かでありながら、そこに溺れないというのが、作曲者の趣味の高さであり同時に演奏者の素晴らしさであるのだろう。

フルトヴェングラーの演奏での限りない価値の高さは、一つのフレーズから次のフレーズがどの様に心理的、論理的に導かれるか、またそ

れが総合、統合されてどのように一曲の全体を形作るかというところに他の追随を許さない高みに到達していたところにあると思う。そのフレーズとフレーズとの心理的、論理的連関ということについて、作曲者の意図の深部まで踏み込んでここまで実現できた人は他にいなかったであろう。楽譜のとおりインテンポで曲が流れていくのに任せるといふことは、彼には考えもできなかったであろうし、だからこそベートーヴェンを始めとする、ソナタ形式の楽曲の解釈とその実現について他の追随を許さない高みに到達し得たのだと思われる。このフレーズか

らフレーズへの論理的な連関と発展を評して「移行の名手」という評語が与えられたことがあるが、私見ではこの論理性の把握を無視した多少皮相なレッテルに思えてならない。

この曲はこのあと3、4楽章が続くが、それでもフルトヴェングラーの至芸は遺憾なく発揮され、この晩年の傑作を十分に味わうことができる。紙幅が尽きたので、ここまでとしたい。

ブラームスの4番をキーとしてフルトヴェングラーの演奏の素晴らしさを少し述べてみた。いろいろと書き出せばきりが無いが、幾分かのご参考になれば幸いである。